

But me more but!

中本 恭平

逆接の *but* は *OALD* (p. 201) で 'used to introduce a word or phrase that contrasts with what was said before' と定義されているように、対比関係を表す。次の2例では「好き⇔好きでない」が対比されているが、いきなり(2)が示されると(1)より不自然であることからわかるように、対比には何らかの意味の共通点が必要である。

- (1) I like cats, **but** I don't like dogs.
 (2) I like cats, **but** I don't like baseball.

(1)では愛玩動物という共通点を感じられるのに対し、(2)では猫と野球を結びつける共通点がすぐには思いつかず不自然である。しかし、たとえば、休日に猫と遊ぶほうが野球をするより楽しいという人が「どうして野球をしないのか」という質問に対して答えているのなら、(2)は「余暇の過ごし方」のような共通点が見いだせ、自然となる。

次例では何が対比されているか。

- (3) I like cats, **but** my wife likes dogs.

意味の共通点は愛玩動物であろうが、「好き」という点では対比されていない。ここで対比されているのは「自分⇔(自分ではない→)妻」「猫⇔(猫ではない→)犬」である。愛玩動物として「猫派」と「犬派」に二分されることが多いという予備知識をもって(3)を解釈すると、「私は猫が好き(なので犬は好きでない)⇔「妻は犬が好き(なので猫は好きでない)」という「好き⇔好きでない」の対比ともみなせる。いずれの解釈でも、「自分ではない」「猫ではない」「なので犬/猫は好きでない」の部分は言語化されておらず、語用論的含意となっている。このような含意は、*but* が用いられる場合に頻繁に生じる。

- (4) I like cats, **but** I like dogs, too.
 (5) I like cats, **but** I don't have one as a pet.

(4)が自然に感じられるのは、「猫が好き(→猫以外の動物は好きでない→犬も好きでない)」という含意が後半部分で打ち消され、「犬も好きでない⇔犬も好き」という対比が成立するからである。一方、(5)では「猫が好き」と「ペットとして飼っていない」との間には直接的な反義関係は成立しない。(5)では「猫が好き(なのでペットとして飼っている)」という推論が働き、その推論が含意化され、その含意が「飼っていない」と否定されて対比が成立する。この例が示すように、含意化は因果関係の結果の部分に起こることがよくある。(5)だけでなく、(3)の「妻(なので自分ではない)」「猫が好き(なので犬は好きでない)」さらには(2)でも「猫が好き(なので猫と遊ぶ)」のように結果部分が含意化されているとみなせる。

以上の考察を念頭に置き、高等学校の英語の教科書では *but* が上記どちらのパターン(対比が明示されているか、含意化されているか)で用いられることが多いか、また後者の場合、どのような対比が含意化されているかを、以下 *Revised POLESTAR English Course I* (数研出版)の英文を用いて検証する。2014年より新課程版として *POLESTAR English Communication I* が発行されているが、本稿で述べることは、その新課程版においても適用できることなので、旧課程版での考察にとどめた。調査箇所は同書の Lessons 1-8 の本文部分のみで、それ以外の部分(Short Story など)は除外した。調査対象としたのは *but* および *however* が用いられている文である。品詞は問わない。

調査箇所ですべて調査対象語は合計 26 回用いられている。そのうち 4 例だけが対比明示型であり、残りの 22 例はすべて何らかのかたちで含意化されていた。*but* や *however* が用いられた文では、その対比関係を正しく理解するためには、読み手が推論しなければならない場合が圧倒的に多いことがわかる。対比が明示されているのは次の 4 例である。

(6) In rice fields, they eat harmful insects and weeds, **but** they do not eat the rice plants. (104:1)

(数字はページおよび行を示し、複数行にまたがる場合は最初の行のみ示す。太字は引用者による。)

(7) I couldn't play cricket on the field, **but** technology provided cricket games on the computer and I was able to play cricket for the first time. (47:12)

(6)では「食べる⇔食べない」が明確に対比されている。一方、(7)では「プレーできない⇔プレーできる」の対比が明示されているものの、因果関係の原因に相当する文(technology ... computer)の存在、および couldn't ⇔ was able to という表現形式の相違があるので、(6)ほど対比が鮮明でない。

(8) It does not create something beautiful, **but** makes people think. (88:8)

(9) Many of you will also answer sushi, **but** there will be only a few of you who know its history. (28:3)

(8)の make を使役動詞として「…させる」と解釈すると対比がわかりにくい。[それ(=オノ・ヨーコの芸術)は美しいものを作りださない⇔人々が考えるという状況を作りだす]と解釈すれば、対比が浮かび上がる。一方、(9)では「多数⇔少数」が対比されている(9)については後述する。

含意化される例は次のように3分類できる。

[A] but (however を含む、以下同様)の前の部分が含意化されている場合

[B] but の後の部分が含意化されている場合

[C] but の前後両方の部分が含意化されている場合

最初に[A]について考察する。

(10) The Eskimos lived far from Japan, **but** their faces were like my own. (70:13)

(11) I already knew that they would be, **but** it was a surprise to see them all the same. (70:14)

(11)は(10)に後続する文である。(10)では「日本から遠く離れた地に暮らしている(ので私の顔と似ていない)⇔私の顔と似ている」、(11)では「私の顔と似ているであろうということがわかっていて(ので驚かない)⇔実際に同じ顔であることを知って驚いた」が対比

されている。いずれも因果関係の結果部分が含意化され、それが but の後の意味内容と対比されている。このような場合には、因果関係が隠れており、その結果部分が含意化されていることに気づく必要がある。(11)ではさらに省略表現が用いられていることもあり、(10)(11)で対比関係を読み取るのは、そう簡単ではない。

次に、[B] について考察する。

(12) Being disabled is normal to me because I've been disabled since I was born. **But** people tend to think I'm different. (46:8)

(13) For years people have said the last place that we have not yet explored is outer space, not on earth. **But** we really do not have to leave our planet. (57:5)

(12)(13)のいずれも、文頭で but が用いられているので、前文の意味内容と対比されているはずである。

(12)では「障害者であることは自分としては普通のこと⇔人々は私を(普通の人間とは)違っているとみなす(すなわち普通ではないとみなす)」、(13)では「人類未踏の地は地球上ではなく宇宙空間だと言われてきた⇔地球を離れなくてもよい(すなわち未踏の地は地球上にある→それは深海である)」の下線部分が対比されている。(13)では「地球上にある」が含意され、この含意にはさらに「深海である」が含意されており、2段階の含意が内在されている(13は深海探査を扱った Lesson 5: Into the Deep の英文)。

(14) The young people spoke English, **but** the older people used Eskimo all the time. (72:8)

(14)では「若者は英語を話す⇔年配者はエスキモー語を話す(→英語は話さない)」であるが、all the time から推測して、「英語は話せない」という2段階目の含意が内在されているとみてよい。これらの例からわかるように、読解作業とは含意を読み解く作業だと言ってもよいほどである。

ところで、前出の(12)(13)では but の後に合わせ but の前を含意化させて「(私は他の人と違ってない)⇔私は(他の人と)違っている」、「(地球を離れなければならない)⇔地球を離れなくてもよい」が対比されているともみなせる。しかし、次例ではそ

のような逆転は許されない。

- (15) I cannot explain why this happened, **but** it was like falling in love, I suppose. (68:3)

(15)では「説明できない⇔恋に落ちたようなものだ(と説明できる)」が対比されているが、「恋に落ちたようなものではない⇔恋に落ちたようなものだ」という対比を読み取ることはできない。また、前出の(14)では「若者は英語を話す(がエスキモー語は話さない→話せない)⇔年配者はエスキモー語を話す」と解釈することも可能であるが、「若者たちはエスキモー語を話そうと思えば話せるが、普段は話さない」という可能性もあるので、「若者はエスキモー語を話せない」とは断定できない。

次の箇所では、However で始まる文の中に but が用いられている。

- (16) He called her “the world’s most famous unknown artist.” **However**, it seems that people are now willing to see her not only as John’s wife **but** as a great artist of our time. (94:14)

まず However の対比を確認すると、「He (=ジョン・レノン)は her (=オノ・ヨーコ)を「世界で最も有名な無名の芸術家」と称した⇔ヨーコを単にジョンの妻としてだけでなく、偉大な芸術家としてみなす人が増えつつある(すなわち有名な芸術家になりつつある)」である。次に、not only A but B について次の各文と比較しながら対比関係を読み取る。

- (17) People do not see her as John’s wife, **but** they see her as a great artist of our time.
 (18) People see her **not** as John’s wife **but** as a great artist of our time.
 (19) People see her **not only** as John’s wife **but** as a great artist of our time.

(17)では「ジョンの妻としては見ない⇔偉大な芸術家として見る」の対比が明確である。一方、(18)では「ジョンの妻としてではなく見る⇔偉大な芸術家として見る」が対比されているが、「ジョンの妻としてではないもの(すなわち偉大な芸術家として見る)」という意味関係が成立するので、but は事実上

対比の意味合いを失う。これは only が入る(19)でも同様で、「ジョンの妻としてのみでなく見る⇔(すなわち)偉大な芸術家としても見る」となり、ジョンの妻としてのみでないとは具体的にどういうことなのか説明する部分を but が導いている。

最後に[C]について考察する。

- (20) Some do, **but** some still write my name as Key, not Kay. (6:3)

代動詞 do は文脈上「I am not a key」(6:1)であることを覚えている(remember)」を意味している。そこで表面的な対比は「覚えている⇔Key と綴る」となりずれてしまう。(20)の対比は「覚えていて(て正しく Kay と綴る)⇔(誤って) Key と綴る」である。Lesson 1: How Do You Spell It? では、(20)の他に次の3か所で逆接の接続詞が用いられている。それぞれの対比関係は下に示す。

- (21) As a result, it may be hard for you to enter a certain school or company. **But** if this is true, why are English words so often misspelled in Japan? (7:8)

- (22) That is funny, **but** it is a basic mistake. (8:4)

- (23) **However**, I still worry about the influence of this kind of strange English. (9:6)

(21) その結果(=漢字を書き誤って悪印象を与えた結果)入学や入社がしにくくなる(ので正しく書く)⇔英単語では誤った綴りを書くのはなぜか(→正しく綴るべき)

(22) それ(=誤った綴り)はおもしろおかしい(のでそのままにしておいてよい)⇔誤りである(のでそのままにしておいてはいけない→誤りを正すべき)

(23) 日本の広告で用いられる英語は単なる装飾(なので綴りが誤っていてもかまわない)⇔この種の変な(=誤った綴りの)英語が及ぼす影響が気になる(ので正しい綴りに改めるべきである)(23の However はその前の段落の内容全体を受けているが、紙幅の関係上、前段落の引用を割愛した。)

対比関係に着目すると、Lesson 1 の著者が一貫して「誤った英語の綴りはよくないので、正しい綴りに直すべきだ」と主張していることがわかる。

対比の意味関係が、必ず逆接の接続詞で明示され

るわけではない。たとえば、Lesson 1 の Part 1 第 2 段落は(24)で始まっている。

(24) I admit that English spelling is difficult. I also admit that sometimes I enjoy my students' mistakes in spelling. (6:7)

「英語の綴りは難しい(ので誤って綴ってもやむをえない)」「生徒の綴りの誤りを楽しむこともある(ので誤った綴りにもよい面がある)」と述べた後、具体的にどのような滑稽な綴りのミスがあるかを紹介している(その引用は省略)。そして、次の Part 2 は(25)で始まっている。

(25) At school, I learned that good spelling is important for good writing. (7:1)

Part 1 第 2 段落と Part 2 は「誤った綴りでもかまわない⇔正しく綴ることが大切である(ので誤った綴りを見過ごしてはいけない)」の対比関係が成立し、(25)の冒頭に But などの逆接の接続詞が補える。逆に、(26)の and は but に置き換えられない。

(26) Some of you will say tempura, and others will say sukiyaki. (28:2, (9)の直前の文)

(27) Some of you will say tempura, but others will say sukiyaki.

(26)では「(どんな日本料理が好きかと尋ねられて)てんぷらと答える人、すき焼きと答える人がいる」となっているが、(27)では「てんぷらと答える(→すき焼きとは答えない)⇔すき焼きと答える(→てんぷらとは答えない)」という対比関係が成立し、まるで「てんぷら派對すき焼き派」のような構造をイメージさせてしまう。しかしこの後、前出の(9)が続くことからわかるように、「てんぷら」も「すき焼き」も「寿司」を導くための前座にすぎず、「てんぷら派對すき焼き派」は脱線になる。

ところで、(9)は「(どんな日本料理が好きかと尋ねられて)寿司が好きと答える人が多い(→寿司が好きなら、寿司の歴史も知っているはず)⇔寿司の歴史を知っている人は少ない(すなわち知らない人が多い)」という対比が行われているとみなすことも

でき、この解釈のほうが妥当である。なぜなら、単に「寿司好きの人は多い⇔寿司の歴史を知る人は少ない」が対比されているのではなく、「寿司が好きであるにもかかわらず、自分が好きな寿司の歴史については無頓着である」ということが主張されると読み取れるからである(Lesson 3: The Story of Sushi は寿司の歴史を扱った章である)。逆接に注目すれば、著者の主張がよく読み取れる。

ところで、A but B 構文の本質は何か。

(28) He may be a good father but he's a terrible husband. (OALD, p. 951, may の用例, 太字は引用者による。)

(29) He's a good father but he's a terrible husband.

(29)では「よき父」を(28)より積極的に肯定している感じがするという点を除けば、「よき父⇔悪しき夫」という対比関係は変わらない。しかし、実際の善悪の対比は「よき父(ならよき夫でもあるはず)⇔(実際には)悪しき夫」という含意が発生していると思われるべきである。なぜなら、この含意から妻の腹立たしさや無念さがにじみ出てくるからである。A but B 構文では、B に話し手・書き手の言いたいことが述べられるのが普通である。このことは、(29)の順序を入れ換えればすぐわかる。

(30) He's a terrible husband but he's a good father.

(30)ではこの男性を好意的に評価している印象を与える。さらに、(29)の前半部分を削除する(=(31))と、この男性にはよい点が見出せないような印象を与え、(32)と同義として解釈されかねない。

(31) He's a terrible husband.

(32) He's a terrible man.

つまり、(29)ではこの男性を父親ではなく夫という観点から見た場合の評価であることが、前半部分との対比から読み取れるのであるが、(31)では比較の対象が明示されないため、聞き手・読み手が比較の対象を推測できるような状況でなければ、(32)のように拡大解釈してしまう可能性が高まるのである。逆接の but や however は、比較という手段を用いて but /

however の後の部分を際立たせる役割を果たしている。

本稿で述べたことを念頭に置き、最後に練習問題をやってみよう。調査箇所から得た but / however の使用例のうち、まだ引用していないものを列挙する。どのような意味が対比されているだろうか。逆接の接続詞の前の部分を削除した文と比較しながら、書き手の言いたいことも確認してほしい。

- (33) She said nothing, **but** picked up a piece of bread and began to butter it with a knife. (17:6)
- (34) At first, it seems that people ate sushi because it is healthy, **but** now they have come to eat it for its taste. (32:1)
- (35) Most vessels which explore undersea drop straight down through the water. Some travel slowly along the ocean floor and collect samples and information. **But** *Deep Flight I* moves around like a fighter plane. (56:4)
- (36) *I would like to visit, but I do not know anyone.* (69:9, イタリック体は原文による.)
- (37) I tried to learn a little of the Eskimo language every day, **but** it was very difficult. (72:9)
- (38) She is best known as the woman who married John Lennon, a member of the Beatles. **However**, that is only part of her. (88:3)
- (39) "I want ice cream." "**But** that's a dessert. We should start with soup, of course." (91:2)
- (40) ... and his mother said, "If you used weed killer, we would not need to pull weeds." **However**, he would not change his mind. (102:5)
- (41) The *aigamo* method is more profitable than you may think. The yield of rice is about 90 percent of that of normal rice. **However**, it sells for a 30 percent higher price than normal rice, ... (106:1)
- (42) "There is great joy in organic farming," he says. "**But** without the support of consumers, my efforts would have failed. ..." (107:3)
- (33) 「何も言わなかった(→発話という行為は行わなかった) ⇨パンを取り上げてバターを塗り始めた(→発話行為以外の行動に出た)」前半部分を削除した文と比較すると、(33)からは「無言の圧力をかけてきた」という意味合いが読み取れる。
- (34) 「当初は寿司を食べたのは健康のため(→味のため、楽

しむためではない)⇨今では寿司を食べるのは味わう(楽しむ)ため(→健康のためではない)」but の前の部分がないと寿司の歴史の話題につながりにくい。

- (35) 「(他の潜水艇は水中を高速で動き回らない)⇨ *Deep Flight I* は水中を高速で動き回る」従来の潜水艇と比較することで、*Deep Flight I* の特徴を際立たせている。
- (36) 「訪問したい(→ので訪問する)⇨(現地に)知り合いがない(→ので訪問できない)」後半部分だけだと「訪問したい」という気持ちが伝わらない。
- (37) 「エスキモー語を習得しようと努力した(のは習得できると思ったから)⇨難しかった(ので習得できなかった)」努力しても習得できないくらい難しい(日本語や英語とはかけ離れている)言語だと言いたい。
- (38) 「オノ・ヨーコはジョン・レノンの妻として有名⇨オノ・ヨーコの一部分にすぎない(→レノンの妻として以外の面では有名でない→以外の面でも有名になるべき)」定説(前半部分)と対比することで、ヨーコの意外な一面が強調される。
- (39) 「アイスクリームがほしい(→アイスが与えられる)⇨アイスはデザートだ(→アイスは最初に食べるべきものとしては与えられない)」ここは対話なので、前半部分は削除できない、but 以下に比重が置かれるので、相手の要求を否定している。
- (40) 「除草剤を使えば草むしりをしなくてすむ(ので除草剤を使う)⇨決心を変えなかった(すなわち除草剤を使わなかった)」決心を変えないという意志の強さの存在が書き手の言いたいことである。
- (41) 「収穫量が 90% しかない(→利益が少ない)⇨普通の米より 30% 高い値段で売れる(→利益が多い)」よい面が強調される。
- (42) 「無農薬農法(アイガモ農法)は楽しい(ので今後も努力を続けたい)⇨消費者の支持がないと努力がむだになっていた(ので努力を続けていなかったであろう→楽しくない)」消費者の支持が必須であることが強調されている。

But me more, more buts!

引用文献

- 橋内武 他(2006) *Revised POLESTAR English Course I*. 数研出版.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 8th ed, 2010. Oxford University Press.

(共立女子大学教授)